



假字本末  
上卷之下

ホ 2  
5587  
2





門ホ2  
號5587  
卷2

冊四  
號里和  
函土



假字新本末上卷之下

草假字

そもく此草假字を。上ふいへる如く。もと漢字新草  
書よりなりといで。知るもの。形がら。たのづから。そ  
とを別ある字新如く。片假字と相双びて。まこと。空にめ  
でたき大皇國の文字と。形むあけりたる。然るをよる  
づ。あらひよたらひたる大皇國。神世より文字新  
り。事こそくちをしる。天武天皇の御世。小肇て造  
ら。先ぬひつる新字。たみ。行を。まじ。てや。ぬるを  
た。くちをし。そ。新も。せむ。あ。こ。あ。り。ぬ。む。朝。鮮。國。の。諺。文

伴信



といふ字形趣ふ。新し製りてこそいあらぬ。漢國の字  
より出て出来たるぞ。阿らぬ事形かぎり形ると或人  
形云へるは。ひとわらうさることあら。漢國の文字  
ハもと何おし。か鳥跡を見て製りてそ免しと。其國字  
その國籍をまがれ。採り用ひ多て。彼國風形さか  
し。だちきる智サリのかぎり。を識り法くして。その惡さ善  
さを擇むてとらせぬ。やがて其文字を取用ひさせ  
ぬへるに阿らせ。おのづから大皇國の文字形以て  
形たるを。鳥跡によれるとこそおあら。びや。そもそ  
も上代も。人の魂もつよたがうへ。淳スナホ朴ホも簡ヨシキあまけ

まむ。よろしの事を云ひつきか。り傳へ。忘る事  
をあらざ。りるを。外國々形さか。たが中るを。はや  
く字をつくり出せるもあり。形り々。さを阿まきと  
大皇國おして。も。千萬年形世を経るふつけて。自ら  
文字形くて有。阿らぬあるほ。上件ふ論へること  
く。漢國形文字書籍どもを獻らせ用む多。穿るふ始り  
て。法ひよ其漢字より。たのづから二種の文字形  
以て。漸し世にあまぬく行をき。よろしの事を  
阿まり阿るまで。多や。よく書記すること。なり。に  
を。殊更に作ら。ぬ。おほやけ。ぬ。御令ミツノツよを

あらば。まことに大皇國守護まゝは神々の御意に  
る。は。蝦夷あどのごとに。殊に卑し。國々。今に至  
の上代。み文字無。思ふ。は。其趣。別。か。て。天武天  
皇の御世。新字の事。ハ。書紀十一年三月の下。命。境  
部連石積等。更。肇。俾。造。新字。一部四十四卷。と。載。ら。れ。た  
。此字。新事。を。釋。日本紀。日本紀。私記。を。引。て。師。說。本  
紀。私記。と。を。釋。紀。の。引。書。に。延。喜。公。望。私。記。ま。公。望。私  
記。お。と。た。ぐ。み。私。記。と。も。い。り。共。小。同。書。ま。公。望。私  
公。望。宿。祿。新。日本紀。私記。取。り。和。名。抄。の。序。山。州。負  
外。刺。史。田。公。望。日本紀。私記。と。稱。す。お。と。田。氏。私。記。一。部  
三。卷。古。語。多。載。和。名。希。存。と。以。て。す。お。と。抄。を。ち。本。文。も  
。あ。り。引。載。ら。れ。る。是。あり。顯。昭。の。袖。中。抄。を。ち。本。文。も  
紀。公。望。注。と。も。云。へ。り。延。喜。六。年。閏。十。二。月。十。七。日。本  
紀。竟。宴。の。歌。新。署。名。は。學。生。蔭。孫。從。七。位。下。矢。田。部。宿。祿

公望とあり。同書目録に。紀傳博士と記せり。師說と此  
を公望の師新説あり。其師の名をいまだ考へば。此  
書今在圖書寮。但其字體頗似梵字。殊詳字義。所准據と  
あるに依りて案へむ。其新字ハ後世の假字のさまあ  
る音字をあらうて。漢國のふ倣ひて。萬の事物を法き  
て。新ふ字を造設け其讀法などを注したるものなり  
りけむ。さるを假字にたとふものならむを。尋常に  
ごとくある一卷も。餘りある法きを。一部四十四  
卷とあるをも。推量りて。いふなり。さるいへど。一部  
四十四卷ハ。あまりふ。あ。り。あ。る。あ。ち。は。新。布。よ  
く考ふ。は。石。積。事。ハ。書。紀。孝。德。天。皇。の。御。世。大。化。四  
年。遣。唐。使。の。條。の。或。説。を。以。ム。ム。學。生。坂。合

○假字本末上卷之下

部連繫積而増焉と云てことさら唐國に渡りて  
も部の學にきりし人なりてことさら本朝書籍に  
類部を新字三十四卷に記し又此書目録に當り  
本よて世に傳ふれりて當り見在の書籍にみ  
任せざる録したるものなりて日本紀よりて  
らぬ證あるに新字もた日本紀よりて  
らぬ證あるに新字もた日本紀よりて  
誤る卷數の三十を冊と見誤りたるより轉れる  
字書に見えぬ字を和字と呼て石積等造れる  
遺傳たりきるものなりと見ゆる事おとさる  
の字を古書ども用ひて見ゆる事おとさる  
りどりの文字を用ひて見ゆる事おとさる  
そめたるものなりその委しき事ハ俗字考云へり  
以づけしも其新字の行をきざりたるを大皇國に  
さはしあるが故なりあるはしその新字造ら  
武天皇の御世に十一年より同天皇の勅語とある古  
事記録にきりしとあるはしその新字造ら

はりの後取らるるに其新字の事をいふは  
さる漢字の用法に苦しめる趣を述べるを  
もさらに行なはざりし事おとさるの未加へ  
新字にことハ別一説ありそを下巻の末に  
いふは漢國にていろは假字を見てもと巴國  
よよまするの事知らずもとより此御國字と  
おもひて以てくた又其いろはを摸して  
彼が國籍に載ざるを今おとさるは寫して論  
事あり其明の世弘武九年わが皇朝永和二年に當  
りて陶宗儀が著せる書史會要に皇國の僧克全と  
免を寫せると是も同じ世未考へは周鍾陳明廷周光  
祚等が著たる音韻字海の附録に載ざる劉孔當が琉

球の通事より得て寫せぬが有り。共小相同し其を。今  
 その會要に載せるを寫して。字海に載たる中ふ異形  
 する處あるをむ書そへく。白圈をもて別ち。字海の事を  
 下論  
 ふ。檢語を黒圈を用ふ。おと彼が寫せる假字を檢ふ  
 小。訛謬多加まハ。並てその右旁ふ正し。假字或書添  
 へつ。さて其書史會要第八曰。日本國於宋景德三年。嘗  
 有僧入貢云々。命以牘對名寂昭云々。國中多習王右軍  
 書。昭頗得筆法。後南海商人船自其國還得國王弟與昭  
 書。称野人若愚。又左大臣藤原道長書。又治部卿源從英  
 書九三。審皆二王之迹。而若愚章草特妙。中土能書者亦

鮮能及紙墨光精云々。以上宋史の文あり。さく所謂若  
 愚の草書を。おの會要に摹し載  
 たり。まゝと宋世の米芾が書史に陣賢草書帖六七。曩余  
 紙字亦希逸難辨。如日本人書。といへる事も見ゆ。曩余  
 與其國僧曰克全字大用者。偶邂逅于海甌。一禪刹中頗  
 習華言云。彼國自有國字。字母僅四十有七。能通識之便  
 可解其音義。因索寫一過。就叩以理。其聯轉成字處。髣髴  
 蒙古字法也。全又以彼中字體寫中國詩文。雖不可讀。而  
 筆勢縱橫。龍蛇飛動。儼有顛素之遺則。今以其字母附於  
 此云。

り 以又近移○以字

ろ ●今檢音釈飲○  
 路字

め は 法平聲又●今檢  
 は之變寫○麗字

以 に 宣●今檢に之變寫  
 ○に尾字

波

波又近妻○布字

入

別至聲又近○入  
比字

止

多又近○止度字  
●今檢之變寫

あ

啼又近○あ知字  
●今檢之變寫

り

梨○り利字

ぬ

奴●今檢ぬ之變  
寫

る

盧○る而字

を

窩○ぬ倭字●今檢  
を之變寫

わ

懷○哇字●今檢  
わ之變寫

か

楷作音○加字

よ

竹○有字●今檢  
よ之變寫

た

大平聲○他字●今  
檢た之變寫

れ

●音釈○九  
字●今檢れ之變  
寫

う

座平聲又近○魁  
字

法

士平聲又近●今  
檢法之變寫

祇

尼縮吉呼○尼字●  
今檢祇之變寫

な

乃平聲○那字●  
今檢な之變寫

ら

阿賴賴作平○利  
字

む

●今檢音釈○  
武字●今檢む之  
變寫

う

烏○鳥字●今檢う  
之變寫

あ

伊○倚字●今檢  
あ之變寫

の

●今檢二書共音  
釈

ね

和又近○ね當字  
●今檢ね之變寫

お

枯○末字●今檢二  
書以下三字くやお  
倒置而音釈次第不  
錯

く

爺作音○古音●  
今檢く之變寫

や

埋○ぬ牙字●今  
檢や之變寫

け

●今檢音釈○  
去字●今檢け之  
變寫

ふ

蒲又近○不字●今  
檢ふ之變寫

こ

輸○孤字●今檢  
こ之變寫

い

●今檢音釈○  
依字●今檢い之  
變寫

て

揀呼○的字●今  
檢て之變寫

あ

作音呼○惡字●今  
檢あ之變寫

さ

又近柴○沙字●  
今檢さ之變寫

き

欺又近○其字

ゆ

由○又字

め

女○も末字●今檢  
め之變寫

み

皮又近眉○み美  
字●今檢み之變  
寫

て

尸又近時○實字  
●今檢し之變寫

ゑ

繫耳聲○ゑ泄字  
●今檢ゑ之變寫

ひ

非○庇字●今檢ひ  
之變寫

も

摩○乙母字●今  
檢も者も之變寫

せ

地又近倉○世字  
●今檢せ之變寫

す

又近○是字●今  
檢す之變寫

京

敲字●今檢京之  
異體

假如曰天則云うら。曰地則云あ。曰山則云うら。今檢  
うら。又云うら。曰水則云うら。曰日則



云ハ日月則云沈き。曰筆則云ふて。曰墨則云ある。曰紙則云ある。曰硯則云あり。大意不過如此。以上音韻字海は夷字音釋と標て。件のおとく假字を載て。其尾に。凡夷國上下文移。往來書札。只寫此數字。凡有音韻畧相類者。即通用。通用をあらはし。彼が予因昔遊閩得遇琉球納欵通事。以此告予。故筆之於書。以助觀覽。諸同志者。幸勿目以為迂云。喜聞劉孔當謹識と記せり。今案る。琉球の通事。然いろは假字を示し。又その首小夷語音釋と題て。天文地理等の釋語を載たる。その用字。音格詳らば。讀得るときも。あまきと多く。

ハ皇國語。ありさるハ琉球。もともと文字無り。聖つるを。永萬のちる鎮西八郎為朝。伊豆の大嶋より琉球へ渡りて。浦添按司某が妹を婚て。生せる子あり。源尊敦と称ふ。文治三年の頃。故ありて。其國の王となりて。舜天といへり。在位五十一年。嘉禎三年卒。其事琉球もろち。孫世を嗣ぐ。すべし。件の為朝舜天の時。もを合せ。證考て。中外經緯傳に記せり。其舜天が已が國字。おとくもて。明して書示し。又皇國言を雅言として。對へ示し。きりしものあり。故孔當も疑存して。琉球語と云は。ど沈く夷語と称へるものある。

誤し。さてその舜天が時より。いろは假字を用ひたる  
事の證を。中山傳信録に。此書を清國の徐葆光が。琉球  
にその國に渡りて。究問し。記せる由。序に見  
えり。その康熙元年ハ。享保十九年ニ當り。琉球字  
母四十有七名。伊魯花。自舜天為王時始制。或云。即日本  
字母云々。と記していろはの句を普通片假字草假  
字一字づつ。二體相並て載とるを見。知誤し。下は寫  
し。又上は寫出せる會要に載たる假字を。克全が  
書て與へたるを傳寫せるほど。字の次を誤り。ま  
字體をも寫むが危きもの。形る誤きを。字海に琉球  
字通事より得きりと云へるも。會要あると全く同じ

誤寫あるが多く見ゆるを意得。故察ふる二書  
のうちいづき。いとく寫誤りたりけるを。一方につ  
きて訂し。とる本の傳をきるものある誤し。然るに京  
字。會要をたねて。字海にあるを。おもへ。字海の傳  
寫本に誤の多かりけるを。會要に校へ。採りたるに  
こそ。かくて今その二書に寫し。載せるいろは假字の  
様。つき。檢訂す。原を。おほく。かくる。さぬ。書  
て與へたり。ものある誤し。

いろはにほへと。ちりぬるを。わか  
またねる。流線ならむ。うぬのねる

やおけふこひてあさきゆめを

忽ひもせよ ○ 奈 この京字も音韻字海にあり奈とらけるも字畫中の

口を△とも作く例は依まざるなり

書史會要に記せる時代の趣よりて推考ふる

ふ。あれ其書著せる洪武九年日が朝廷の永和二

年よりや、曩つゝ。貞治應安那どの頃ある迄

し。克全が書て與へざるいろはの書體ある事決

し。志うまむ確ある證もなき空海にありといふ

るものよりハ。かへりて今より五百年むかひ

昔の書體を證とまづきなり。

さて會要にいろは字鬚蒙古字法也。と云へる蒙古

字の事を上り攀たるが如く。元の世祖が至元五年に

帝師巴思八米梵文創為國字字母四十三。といふなり。そ

れ至元五年ハ皇朝の文永五年ふ當りて。普くいろは

假字行ちる事と知り。後此事なり。蒙古字法

ハ鬚鬚たりといへきと。時代の前後もて云ふと然ハ。

あれがああと似たるなり。ハ草假字を見め

て。其體に擬ひ。ハ。明の何喬遠が

呂宋の條ハ。南倭北虜皆有文字。類鳥跡古篆意。其初有。達人制之。邪とも云へり。いたる南倭ハ。新井君美主。の南嶋志。漢籍どもを考て。琉球の事なり。といはれ。とるハ。然るあともて。字海に琉球の通事よりいろは

假字を得たりといひ、あゝに類、鳥跡古篆といふも相合ひてきこゆ。又北虜を、蒙古をいへるも、其字體を、あゝといふるを、陶儀が説と同じ趣なり。さて今のもろあゝの清王が祖、その本國満州にて蒙古字を、清三朝實録に、満州王愛新覺羅、努爾哈齊が時、皇朝を、慶長四年に當る年、係上、以蒙古字、集為國語、領行、額爾德尼、榜式、噶蓋、札爾固齊、曰、以我國語、製字、為善、但編輯之法、臣等未明、上曰、阿字、下合、一麻字、非阿麻乎、額字、下合、一墨字、非額墨乎、吾籌此、已悉、爾等試書之、何為不可、於是、上獨斷、將蒙古字、編為國語、創立、又古猶滿文、頒行、國中、滿文、傳布、自此始、と見えり。も明の世、萬曆が始、皇朝の天正の頃、不當りて撰たる。日本風土記に、字書の條に、本國自古及今、尚無學校。雖有字書、全無真正字體。而官民子弟、幼學皆從師於釋教。雖釋教頗通中國真字、但本國慣以習草為常、傳襲緊熟。

以真正字書、視非切要、故不習耳。且通國公文、私劄、絶無真字。悉用草書。童蒙初學、止四十八字。名曰以路法。以四十八字、分別清濁之音、一應諸書、文俗之言、悉皆通用。本國之人、間有精熟四十八字、能變通字體者、即為飽學也。及考諸書、草草之中、彼が國の諸書、極草の字體の間、有一二字、樣與中國相似。本國文意、頗同呼音、又異。つゝも、己が國字、據ある。今將啓蒙四十八字、音注、明確集成草字、于後、草字とは、草假字を云へるなり。形ど草體を云へるを、あらび、下、另將吾書四十八篇、另分文、も其國草書と云ふり。下、另將吾書四十八篇、另分呼音讀法、釋音切意、字は草字を交へ、書るを、數首、寫し

國字本末上卷之下

十

載て其をよみ 妥貼辨證別分一卷 以便彼我國人之易譯也

以路法四十八字樣 音注 清濁變用

レロ以 音以弓一伊異 通用 路魯六盧陀羅 落通用

はえ 音法白拔敗排 拜通用 音尔尼義宜你 通用

は好加 音浮復福伏泊 通用 音四穴別邊遍 便通用

そと 音多墮陀獨禿 篤通用 音地七之吃即 席通用

レリり 音里利立烈劔 通用 奴怒度孺捺戶 通用

るるり 音而二 音和賀紅渾倭 呵通用

わに 音外活話黃華 坳通用 音革客角褶開 俺各隔通用

よよ 音搖要耀玉欲 通用 音打他太坦達 答帶通用

きれ 音利里礼力立 連列通用 音肝迷宿促挫 佐坐足通用

つし 音子紫此茲亂 辞慈通用 音捏業逆年儼 通用

な 音乃柰拏鬧 通用 音即賴懶樂爛 落老通用

む 音木莫目摩磨 母通用 音户胡烏姑鼓 五通用

○假字本末上卷之下

ゐ 音意衣以矣我  
通用

お 音和或訛哉我  
通用

お 音養志羊耶也  
矣業通用

い 音計傑絮吉結  
及劫通用

い 音過哥可蛾谷  
果通用

て 音天鉄疊敵迭  
佚牌通用

そ 音索作昨殺者  
酌通用

の 音那平聲奶乃

く 音過忽骨或古  
通用

ま 音埋蠻謾瞞馬  
麻通用

お 音復勿福否卜  
北通用

い 音夜月越曰元  
出通用

あ

さ

ゆ 音由有友憂油  
又通用

お 音覓密鼻滅  
通用

ゑ 音業孽遠願  
園源通用  
音虛許皮肥  
被彼此

せ 音設熱舍手  
赦石折浙  
音交朝招喬  
焦消小肖

め

え

と

す

今檢るふ。件の本文に四十八言と記せるハ。京字  
を加へて云へる形を。右形假字は。ひと京と  
の二字を脱して。四十六字を載せ。その脱たる二  
字の音注形みゆるを。音虚云々を。ひ字の音注。音  
交云々を。京字此音注形。

はやく二字を寫脱せる本よりて。此記より寫し  
 載たるものなり。さて件の字體に訛まるや音注  
 の疎りして謾なるをさらみ。中よりは假字のみ  
 を攀て音注を脱せるも有り。是も既く寫阿や海  
 きる本のおくにとり載せるものと見えり。又  
 音の條より切音正舌歌を作て記し。いらく俗  
 日郷音處々別古聖先賢難校切換哀界蓋總依稀  
 耶陽養也通彷彿云々若然認字經呼音十有五  
 他未識對答要句与徐々自然音正無差迭とい  
 書法に因り。

岩衣山帶

杲 結 衣 木 氣 打 而 以 外 和

こげ、衣、ぬき、ちぢりあ

外 索 木 革 頼 天 氣 奴 氣 奴

じしをのしきぬきぬ

山 尼 和 皮 和 事 而 客 乃

山はあひあするの心

呼音

衣 過 路 木 山 陽 脉

讀法

杲 結 過 路 木 氣 打 路 依 外 和 索 木

草真 井	草真 フツ	草真 あつ	草真 とと	草真 いイ
依如讀而 草真	即如讀律 草真	哇如讀和 草真	都如讀登 草真	依如讀人 草真
刀ノ	祿子	加力	ち千	ろ口
奴如讀乃 草真	你 草真	喀如讀加 草真	痴如讀知 草真	魯如讀類 草真
才	奈十	よヨ	わ川	はハ
烏如讀於 草真	那如讀奈 草真	天如讀有 草真	利如讀里 草真	花如讀波 草真
しク	らラ	た夕	ぬ又	にニ
姑如讀可 草真	喇如讀羅 草真	達如讀太 草真	奴 草真	義如讀仁 草真
也	むム	れ乙	留ル	ほ木
耶如讀也 草真	某如讀無 草真	力如讀礼 草真	祿如讀留 草真	夫如讀保 草真
まマ	うウ	ろリ	をウ	へ
馬如讀末 草真	務如讀宇 草真	獲如讀卒 草真	烏如讀遠 草真	揮如讀飛 草真

○假字本末上卷之下

○十四

又上よ心する傳信録ふ也。

字母

切意 苔蔽岩<sup>ヲ</sup>穿衣没<sup>シ</sup>領<sup>ヲ</sup> 霧横<sup>ル</sup>山繫帶無<sup>レ</sup>腰

かゝるさぬものゝて歌數首記せり。可<sup>ラ</sup>咲<sup>カ</sup>る<sup>シ</sup>を

因<sup>ニ</sup>ふ<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>一首<sup>ヲ</sup>越<sup>ス</sup>う<sup>ツ</sup>つ<sup>テ</sup>添<sup>ヘ</sup>へ<sup>シ</sup>。

釋音

革<sup>カ</sup>頼<sup>ラ</sup>鉄<sup>テ</sup>氣<sup>キ</sup>奴<sup>ヌ</sup>氣<sup>キ</sup>奴<sup>ヌ</sup>陽<sup>ヤ</sup>脉<sup>マ</sup>尼<sup>ニ</sup>和<sup>ワ</sup>皮<sup>ヒ</sup>和<sup>ワ</sup>所<sup>ス</sup>而<sup>ル</sup>革<sup>カ</sup>乃<sup>ナ</sup>。

果<sup>カ</sup>結<sup>ケ</sup> 苔<sup>カ</sup>塵<sup>チ</sup>蔽<sup>シ</sup> 衣<sup>イ</sup> 正音<sup>シ</sup> 氣<sup>キ</sup>打<sup>ダ</sup>路<sup>ロ</sup>穿<sup>ス</sup> 依<sup>イ</sup>外<sup>ゲ</sup>和<sup>ワ</sup>岩<sup>ガ</sup>。

外<sup>ゲ</sup>助<sup>ジュ</sup>語<sup>ゴ</sup> 索<sup>ソ</sup>木<sup>モ</sup>革<sup>カ</sup>頼<sup>ラ</sup> 没<sup>メ</sup>頭<sup>ト</sup>領<sup>リ</sup> 氣<sup>キ</sup>奴<sup>ヌ</sup>氣<sup>キ</sup>奴<sup>ヌ</sup> 霧<sup>キ</sup>單<sup>ダン</sup>。

山<sup>サン</sup> 正音<sup>シ</sup> 尼<sup>ニ</sup>助<sup>ジュ</sup>語<sup>ゴ</sup> 和<sup>ワ</sup>皮<sup>ヒ</sup>帶<sup>タイ</sup> 和<sup>ワ</sup>所<sup>ス</sup>而<sup>ル</sup>革<sup>カ</sup> 乃<sup>ナ</sup>守<sup>シ</sup>脫<sup>ダ</sup>き<sup>キ</sup>る<sup>ル</sup>。

無<sup>ム</sup>腰<sup>ヤウ</sup>



草 眞 忽 卫 意如讀忌	草 眞 夕 升 沙如讀世	草 眞 計 兮 其如讀計
草 眞 凡 匕 蚤如讀比	草 眞 夕 夫 基如讀其	草 眞 不 不 夫如讀不
草 眞 毛 毛 毛	草 眞 由 工 大如讀由	草 眞 料 工 庫如讀料
草 眞 世 世 世	草 眞 女 女 靈如讀女	草 眞 江 工 而如讀江
草 眞 す 入 使如讀才	草 眞 三 三 米如讀弁	草 眞 天 天 梯如讀天
草 眞 二 二 媽	草 眞 し 之 志如讀之	草 眞 安 尸 牙如讀安

琉球字母四十有七。名伊魯花。自舜天為王時始制。或云即日本字母。或云中國人就省筆易曉者教之。為切音。色記。本非也。閩語の或云の説あり。古今字繁而音簡。今中國切音字母。舊有三十六。後漸簡為二十

八。自喉齶齒唇翕輕重。疾徐清濁之間。隨舉一韻。皆有二十八母。天下古今有字無字之音。包括盡矣。今實畧彷彿此意。有一字可作二三字讀者。有二三字可作一字讀者。或借以反切。或取以連書。如春色二字。琉人呼春為花魯。二音。則合書ハ口。二字。即為春字也。色為伊魯。二音。則合書イ口。二字。即為色字也。若有音無字。則合書二字。反切行之。如村名泊。與泊舟之泊。並讀作土馬伊。則一字三音矣。村名喜屋武。讀作腔字。則又三字一音矣。國語多類此。國人語言。亦多以五六字讀作一二字者。甚多得中國書。多用鈎

挑旁記。逐句倒讀。實字居上。虛字倒下。逆讀語言亦  
然。本國文移中。亦參用中國一二字。上下皆國字也。  
四十七字之末。有一字作二點。音媽。此另是一字。以  
聯屬諸音為記者。然書くを。聯屬諸音為記。と以  
ひて。另ニ舉たる形。但一媽と讀然るを心得を  
メニ。めニなど書て例を示せるを。おま。心得を  
得むが。た。共四十八字云。元陶宗儀云。琉球國職  
貢中華所上表。用木為簡。高八寸許。厚三分。濶五分。  
飾以髹。釦也。と見え。以錫貫以革而橫行。  
刻字於其上。其字體科斗書。又云。日本國中自有國  
字。字母四十有七。能通識之。便可解其音義。其聯轉

成字處。髣髴蒙古字法。以彼中字體。寫中國詩文。雖  
不可讀。而筆勢縱橫。龍蛇飛動。儼有顛素之遺。又云  
以下ハ上ニ引出ざる如く。明の洪武九年。宗儀  
著せる書史會要の文を切畧て記せりと見ゆ。  
元ニ仕へざる人。おま。そのか。おま。へをもて  
會要を著たせる。元ニ仕へき。りける。頃記せる書。お  
も。り。を採まる。今琉球國表疏文。皆用中國書。陶  
所云。橫行刻字科斗書。或其未通中國以前。字體如  
此。今不可考。今推考する。木簡。科斗字を橫行  
假字を一字。刻き。り。といへる。ハ。件の。い。ろ。は。の。草  
は。書き。る。各。行。字。の。相。並。び。き。る。を。橫。行。ふ。科。讀。べ  
と。以。て。見。る。ハ。その。假。字。を。拙。き。手。し。て。木。簡。に。刻。り

きりむみそ然も見ぬすはきものなりさて又片  
假字も舜天の時より用ひあるおとくもたこ  
やれどそハいつりむ後漢籍の訓ざぬを  
どを習ふとて傳をまゝるふもあるはし  
又科斗書の表といへるハ傳信録の明史實録を  
引て舜天より九紀察度ハ世明の洪武五年王  
遣弟泰期奉表貢方物是為琉球通中國之始とい  
へる度の表と死年遣漢文日改等國子監讀書  
のさ次五年遣漢文日改等國子監讀書  
國人就學自茲始とる後の事なるはし  
但今琉球國字母亦四十有七其以國書寫中國詩  
文筆勢果與顛素無異蓋其國僧皆游學日本歸教  
其本國子弟習書汪録所云皆草書無隸字今見果  
然其為日本國書無疑也次は琉球語とて天を町  
字よその對  
語を記せり

右にむとく書載たり。そもく皇國は用ひ來きる漢  
字。真行草三體中おも草體や殊小ふさひきりやむ。  
其字製れる本國の漢人すら。よろづ外夷おど卑し  
免れとまゐる心なりひも日すれて。皇國人の書きる草  
書。おも草假字を以てく賞メデきる事。上お奉たるがとおと  
し。中おも會要いろは假字をもとより。皇國文字  
と意得て。筆勢縦横龍蛇飛動。儼有顛素之遺。おと称を  
て。以てく免れどろ免れざるをとおとこりよこそ。傳信  
録を琉球人の虫ズガキ書ををら。其以國書寫古の  
中國詩文筆勢果與顛素無異といへり。古に聞えこの  
を手書テカキのむさらなり。今に世の人のも。草假字のはし

里の如はいきわひあゝ女文形うちとけて形おや  
おちらし書ある形どを見せよ。よろけうちねもふお  
ころのまよしくかく書とくのふる趣を示したらむ  
を。とりづくに龍蛇とも神とも名でねどろくほきも  
形をや。然を阿れど鈴屋翁の語。まべものを書く  
ハ。事形あゝろを志免さむとてお形む。おふ形く字  
さざろよこそか。まほし々。さるををら筆の  
いきほひを見せむとのみしするハ。いり形あ  
もよみとねがとねがよおねわかる。阿ぢねあきわさ  
形り。とひをれとるを。まおとよさるあとね里。あ玉  
勝間ふ

見えくり又同書ハ歌あどさらぬ事おも物かくみ心  
得べきあどふ類ハの言を誰も有を聞きけをさけむち  
れをあどふ類ハの言を誰も有を聞きけをさけむち  
書おとあれどもあまの格ふてハ何るを聞きけをさけむち  
よおれ其外もその格ふてハ何るを聞きけをさけむち  
ぬ入ハよみあやまりて写すも書おけハ語の意を  
くハと互ゆりま霞契あど言を言おけハ語の意を  
むかく互ゆりま霞契あど言を言おけハ語の意を  
き己が形りあ霞契あど言を言おけハ語の意を  
む月ち契ぬ契言の葉あど言を言おけハ語の意を  
里霞月契ぬ契言の葉あど言を言おけハ語の意を  
時を霞み契ぬ契言の葉あど言を言おけハ語の意を  
とさつら文字をそへく書をけしをの葉あど言を言  
とみつら文字をそへく書をけしをの葉あど言を言  
ざれまらる事阿の時ははとらく文字を添てか  
む霞み霞む霞光の事阿の時ははとらく文字を添てか  
と云ふおた紅葉とのみむの類ひり又もと霞ま  
どおだる故ふつねま紅葉とみむの類ひり又もと霞ま  
里いとあるま書き書しあ形もみちとと書おと霞ま

ててるをその家の字をかき取り又かくれがすみ  
ろかどおの意に家といふとみあらはれど  
の如く書くべきにちとらざむを假字はかくぞ  
處と書く隠る住や此類ひ上を眞名下を假字は書るを  
おちた又隠る見や此類ひ上を眞名下を假字は書るを  
そやちおぼくゆが物を見らるが詠を聲を長むる  
あとなつてその物を見らるが詠を聲を長むる  
て又つねに目類ひの文字を流かふこと多かりし  
しすべし上件類ひの文字を流かふこと多かりし  
准へる知る傍の文字を流かふこと多かりし  
ねふ目知る傍の文字を流かふこと多かりし  
意をよく明し注さむた然るに書名を流かふこと多かりし  
又あらはれぬ訓を當て其訓假名をつく流しみつか  
ら書ける文はすて然るやうな水便よたどあ  
人の心まらはすて然るやうな水便よたどあ  
傍きわざり殊小書籍をおのせむと里はさく  
しものみあらはれ人も寫しつとへ後世も書傳ふる

もの形を一字もおろそららばつらにささぐ  
ふかき置て人形よみとあふおとれた心志らひす流く  
まにかへ里よみして書そあひたらむをも正はべ  
き取り人よあつらへて書志免たらむをあとに心  
を流けて好く訂しおく流き事ふこそつねにささぐ  
書取したる本どもをよむわづらひ多る心をおしそ  
後見む人のうへおねをばしてかへをくぬもおろ  
よもの流べきわざ取りかしかくはおもへどおのれ  
手かく事形いとつとあきがうへおあきもあ形もと  
おもひ入るる心のすさびふつともあらはれ

あくちせられぬ。かあらばしも云ふおとくもはえ何  
らぬぞくちをし難や。さてまゝお移も鈴屋翁の語ふ。  
皇國の事を古書どもも漢文さへ讀みかけたる。假字と  
いふものなくして。せむうとなく止事を得ざる故邪  
乎。今をかあといふもの有りて。自由あり。あくに。そ  
れをすて。不自由なる漢文をもて。あむとほるを。  
いふものむが。あろそや。といふを。しもまあ。とに  
志あり。因ふいふ安永の頃。桂川中。良主の著。なされ。た  
記し。たる。書ふ。支那。文字。を。笑。て。曰。唐人。の。風。土。を。  
附け。事。に。依。て。字。を。製。せ。一。字。一。義。の。所。り。の。所。り。或。ハ。一  
字。を。十。言。二。十。言。も。用。ふ。る。も。一。義。の。所。り。の。所。り。或。ハ。一  
て。數。ふ。言。し。勤。學。す。ま。と。も。生。涯。巴。が。國。字。を。覺。え。盡。し。以

その義も通曉する事何となく。さるる者少なり。て。己。が。國  
の。記。し。たる。書。に。依。て。字。を。製。せ。一。字。一。義。の。所。り。の。所。り。或。ハ。一  
字。を。十。言。二。十。言。も。用。ふ。る。も。一。義。の。所。り。の。所。り。或。ハ。一  
て。數。ふ。言。し。勤。學。す。ま。と。も。生。涯。巴。が。國。字。を。覺。え。盡。し。以  
皇朝のいふ。一。八。簡。易。の。目。標。に。唐。土。の。文。字。を。假。用。  
れ。る。事。と。降。り。て。五。十。音。の。目。標。に。唐。土。の。文。字。を。假。用。  
ふ。る。事。と。降。り。て。五。十。音。の。目。標。に。唐。土。の。文。字。を。假。用。  
文。字。の。音。義。を。用。ふ。る。事。と。降。り。て。五。十。音。の。目。標。に。唐。土。の。文。字。を。假。用。  
き。吾。國。風。を。用。ふ。る。事。と。降。り。て。五。十。音。の。目。標。に。唐。土。の。文。字。を。假。用。  
何。事。そ。や。紅。夷。と。い。ふ。事。多。く。煩。を。し。唐。風。を。用。ふ。る。事。  
る。べ。お。え。ぬ。唐。土。の。字。學。も。こ。そ。ハ。何。ら。今。の。世。に。お。い。は。れ。  
ある。と。あ。と。唐。土。の。字。學。も。こ。そ。ハ。何。ら。今。の。世。に。お。い。は。れ。  
なり。と。漢。字。の。數。を。毛。利。貞。齋。が。増。續。大。廣。益。會。玉。篇。  
大全。を。數。種。の。字。韻。書。を。毛。利。貞。齋。が。増。續。大。廣。益。會。玉。篇。  
載。たり。さ。ま。ど。の。遺。り。も。あ。り。ぬ。べ。く。皇。國。の。事。實。ま  
も。漏。ら。ぬ。可。ざ。なる。べ。く。皇。國。の。事。實。ま

○假字本末上卷之下

○千

た地理などを漢文もて書記したるが。その國よりして  
きて。あれが形ましく。ふ讀と多あらむるを。かへりて  
皇國の御稜威<sup>ニ</sup>をねとくむるもと。もかるは。はる  
む。かへは。くも漢文もて書おど。たさ。形りかし。近  
頃。清國の朱彝尊<sup>ニ</sup>が曝書亭文集<sup>ニ</sup>。吾妻鏡の跋文<sup>ニ</sup>を作  
り。きるを載て云。吾妻鏡五十二卷。亦名東鑑。云云。編中  
所載。始安徳天皇治養四年庚子。訖龜山院天皇文永三  
年七月。九十八有七年。歲月陰晴必書。餘紀將軍執權次  
第。及會射之節。其文辭輻又點。倭訓于旁。譯之。不易。而國  
之大事。及畧之。所謂不賢者。識其小者而已。云云。とい  
る事も見え  
ゆるをや。

假字本末上卷附録

或人本書に論へるいろは歌也。梵讚の句調よりよれる  
和讚も了。まゝ鄙歌形もと。形りあど。いへる説を。くを  
しく。形りむと。いふ。ふ書て見せしるを。おれ。くハ。此  
ふ記し。そへ。あらま。かむと。いふ。よ。ま。く。が。ひ。く。書。加  
へ。効。

按ふいろは歌を本篇に論へる如く。七言より起。め五言  
と句を互に。形して五言に結。め。八句四十七言の調。よ  
て。あ。は。僧。家。に。和。讚。と。て。唱。ふ。歌。の。始。り。て。後。つ。ひ。ふ。形  
べ。て。形。鄙。歌。の。も。と。も。あ。り。たり。と。ぞ。き。こ。え。たる。

ま川和讚と一も云へるを。梵讚の句調は叶へく漢國  
 にくその國言もて作まる漢讚といふが有るは擬ひ  
 て。皇國言もて作まる讚は由あり。然るをもと天竺國  
 りて梵讚とく。佛教の旨を演たる梵語の讚歌は有る  
 が中の一體は。皇國もて和讚といふの句調は似  
 たるが多し。但し梵音を皇國のごとき正しは單直の  
 きを皇國言の例をもて其音數を嚴よ律す其を大日  
 經の四智梵讚は。唵縛日羅薩怛縛。音七。蘊蘊羅賀。音五  
 縛日羅。音七。摩覩怛覽。音五。縛日羅達磨。音七。誡夜那。  
 音五。縛日羅錫麼。音七。迦嚕婆縛。音五。と有るがたとは是れ

了。件の讚は句の下に書る音數を今おのかくてその  
 梵讚の意を漢人が其國の語に譯し。その梵音は句調  
 に叶へ作りて。やがて其聲明に擬ひ唱ふを漢讚とい  
 へり。漢國音を濶雜紆曲にして拗音なるも多かれを  
 をもて論す。修きなり。すれは件の四智は漢讚を金  
 剛頂畧出金剛經に載たる。金剛薩唾。音攝受故。音得  
 意无上。音金剛寶。音金剛言詞。音歌詠故。音願成金剛。  
 音兼仕業。音と有るがたとは是れり。空海まると然る  
 漢讚は例よりて。かの四教法文の意をさらる皇國  
 言は譯して。件の四智梵讚をどく同し句調は四十七

○假字本末上卷之下

○世



音を整へて。いろはの讃歌を作りて。かの漢讃といふ  
ま倣ひて。和讃といふりしものあるは。其ハ上ニ攀  
たる源信の語。いろは歌の事をイロハニホヘト  
讃と云ひ。又讃文字那と云へるをも證といへく。ま  
後世ハ和讃歌の同ト句調なるをても。いろは歌す  
那をち和讃もて。後ハ佛法の意を述て。其節奏ハ唱  
歌を。うちようせて和讃と稱ふ事とあきる由をも。推  
し免ぐらして知るは。あり。但一寛元三年三月廿八日。平戸記。經部高部卿。平花供。  
の佛事の下。此ハ間誦。今度。新花讃。此ハ三度許。念佛相  
交誦之。其後誦。新五偈。漢讃。次誦。其和讃。是皆予制。作之。  
と見え。る。漢讃。和讃。ハ。此ハ論。へる。讃。を。作。り。其。意。を  
へ。る。る。を。あ。ら。う。て。と。新。に。漢。文。の。讃。を。作。り。其。意。を

例の和讃ハ作られぬ由あるは。さて又前ハ花讃  
とあるも。漢文のなるは。も。ち。ら。同。義。と。心。得。べ。り。  
び。さて和讃ハ事の本見。阿。ら。り。ある。ハ。砂石集。弘安  
僧無。行基菩薩。和泉國ハ降誕。云々。薬師と云。下  
住著。女の腹に宿。給へり。心ふとのやうに。生。ま。り。け  
れむ。阿。や。み。鉢。入。り。門。ハ。檀。の。お。さ。り。阿。を  
て置。云々。日來。經て。後。う。つ。く。一。た。童子。一。人。出。來。る。即  
成人して。東大寺。大佛殿。などの勸進聖と。那。り。あ。ん  
里。彼御誕生の所。昔より。講行。那。ど。修。して。和讃。作。り  
誦。し。侍。る。其。初。の。詞。ハ。和。讃。の。歌。數。首。あ。る。中。ハ。薬。師。御  
前。の。御。誕。生。あ。り。ふ。と。も。そ。似。たり。なる。す。り。こ。は。ち

る。さしいきて。榎木エノキのまゝにぞ置おまゐる。或人語コトりけ  
るは寔マコト不奇特不思議フキョクフシギおれども和讃の詞いとよろし  
からば信心もさむる心ちせり。冥佛ミョウブツおみ免マクらるれ  
を斗帳トウチャウをかくる如く。此和讃も箱中ハコナカをさむべきを  
やと云々と云へる事見えミ。件ツグの和讃ワサンいろは歌の  
句調クマツウとあそく同ドウじさ  
て和讃の詞いとよろしからばと云へる事コトを云へる形カタり  
東大寺トウダイジ要録ヨウロクの歌の意イ薬師ヤクシとは行基ユキが事を云へる形カタり  
胎タラシ衣イ襪ワキ纏マキ父母フボ忌イミ之ノ閣カク樹ジュ枝エ上ウヘ經キョウ宿シュク見ミ之ノ能ノ言コト收ウケ而シテ養ヤシ  
之ノ云ク々トと云へる趣オモり。おの記キハ寛和年中カンワノナカに作る  
朝アサ往ユキ生シヤウ傳デンる見ミえス。又今昔物語集イマコトモノリに千觀内供センクワンノウキウが  
事を奉ホウて。顯密ケンミツの法文ホフモンを兼カミ學ガクぶる心深く智チり廣ヒロく

て。二道ニミチに於オケて悟サトり不得フクと云事コト無し云々亦阿弥陀アミタの  
和讃ワサンを造ツクる夏ナツ廿餘ニジュウヨ行ユキ也。京田舎キョウテンカお老少ラウシヤウ貴賤キケンの僧ソウ。此讃コト  
を見て興キョウ小コ翫クワンて。常トコに誦ソウする間マに皆みな極樂淨土キョクラクジユウに結縁ケツエン  
と成ナリぬ云々亦權中納言ケンチュウナクノミコト藤原敦忠フジハラノリタカ卿キミと云人ヒトお第一ダイイチの  
女子コノナありたり。年来ネンネ千觀センクワンの師壇シダンの契ケツを取トルて。深く貴  
敬ケイふ事コト无限ムゲンし云々。後年月ノチトキを經スて。遂スヘに命イノチ終ハシらむとほ  
る時トキに臨ミて。手テに造ツクる所トコロの願文ガンモンを捲マキり。口クチに弥陀ミタを念ネン  
佛ブツを唱ナゲて失ウシふたり。其後ノチ彼女カノメの夢ユメに千觀蓮花センクワンレンカの船フネに  
乗ノリて。昔造ムカシツクまりし所トコロの弥陀ミタの和讃ワサンを誦ソウして。西ニシに向ムクて  
行ユキくと見ミたり云々。といへる事コトみえス。此事コト著聞集シヤクブンシユ

るも載て。千觀ハ空也上人の教よりて。道世たる  
人形りといふ。日本徃生極樂記。云々。延曆寺。阿闍梨傳  
井餘行。都鄙老少。以為口實。極樂結緣者。徃々而多矣。云  
云。とも云へり。さく空也。上人。天禄二年七十歳。没て  
薨。多。千觀。永觀元年。六。今も空也和讃。とて其歌。以  
と多く傳ち。終るを。おもへむ。其中ハ。はやく空也上  
人の作りぬるも。かの千觀ガも。ありぬべき形り。悉  
い。ろは歌と同調あり。おもむ合を。清し。一。その和讃の歌  
ほと。あく移り来て。五更の空。さぞあり。ま。つ。二。つ。時。候  
常の。わが命。い。片。う。生。死。ま。陥。さ。ら。む。又。三。界。と。あ。ろ。廣  
け。ま。ど。来。り。て。死。せ。さ。る。と。こ。ろ。あ。し。四。生。の。か。さ。ち。多。け  
れ。ど。生。ト。て。死。せ。さ。る。と。こ。ろ。あ。し。風。体。五。生。の。か。さ。ち。多。け  
古事談。ふ。恵。心。僧。都。金。峯。山。占。ま。正。へ。た。り。巫。女。有。と。聞。て。只  
一人。令。向。ふ。心。中。の。所。願。占。ま。正。へ。た。り。巫。女。有。と。聞。て。只

る。十。萬。億。土。の。國。まで。ハ。海。山。隔。て。遠。々。れ。ど。心。の。道  
だ。み。直。々。と。見。え。た。る。歌。ハ。上。は。讚。あり。此。江。談。み。空。占  
れ。む。云。々。と。見。え。た。る。歌。ハ。上。は。讚。あり。此。江。談。み。空。占  
事。を。寄。四。教。法。文。作。イ。口。ハ。ニ。ホ。へ。ト。讚。給。と。事。體。源。抄。源  
信。が。謚。あり。此。信。が。四。教。法。文。作。イ。口。ハ。ニ。ホ。へ。ト。讚。給。と。事。體。源。抄。源  
も。見。え。し。同。書。は。白。河。院。の。時。近。藤。と。い。へ。ん。事。體。源。抄。源  
す。ね。し。う。け。て。ひ。た。る。歌。と。太。藤。の。み。あ。げ。の。御。前。召。合。も  
さ。ね。し。う。け。て。ひ。た。る。歌。と。太。藤。の。み。あ。げ。の。御。前。召。合。も  
あ。ろ。も。う。け。て。ひ。た。る。歌。と。太。藤。の。み。あ。げ。の。御。前。召。合。も  
あ。ま。り。も。う。け。て。ひ。た。る。歌。と。太。藤。の。み。あ。げ。の。御。前。召。合。も  
治。元。年。六。月。廿。五。日。ハ。那。事。を。要。林。院。侍。從。大。納。言。成。通。卿。召。合。も  
堂。の。内。み。入。り。て。死。す。や。う。の。外。居。て。何。れ。の。草。木。の。忽。ち。わ  
ん。さ。り。も。千。手。の。誓。ど。ま。り。も。枯。れ。る。草。木。の。忽。ち。わ  
花。さ。り。も。千。手。の。誓。ど。ま。り。も。枯。れ。る。草。木。の。忽。ち。わ  
く。ま。り。も。千。手。の。誓。ど。ま。り。も。枯。れ。る。草。木。の。忽。ち。わ  
除。ぞ。き。の。も。う。き。一。經。又。の。身。ハ。十。二。お。き。つ。願。を。衆。病。悉  
す。ぐ。法。文。と。り。も。う。き。一。經。又。の。身。ハ。十。二。お。き。つ。願。を。衆。病。悉  
讚。を。法。文。と。り。も。う。き。一。經。又。の。身。ハ。十。二。お。き。つ。願。を。衆。病。悉  
お。同。句。調。よ。て。い。ひ。づ。れ。も。佛。語。の。傳。の。字。音。を。交。へ。て。み

○假字本末上卷之下

○世五

雅し高野寺のさまよて用ふる梵漢の片假讚を記せる古なり。但  
を見けるに未と和讃の歌を片假讚を記せる古なり。但  
ホトケニナリモケナリトカワレラモナクサレハ  
よ五障ノクモコクアツクモ龍女ハホトケニナリモ  
ケリとありて墨譜を點し次お龍女ハホトケニナリモ  
三の段ニ唱ふて二書たるものなり。云々。龍女ハ  
云の然らば例の和讃の句調あり。終て七言の一句多  
し。然らば例の和讃の句調あり。終て七言の一句多  
藝州嚴嶋住良舜開置之畢于時天文十三年三月廿一日と  
書せり。件の和讃を殊さらむ。此ほ一首載ある。高野寺は傳  
の作れる和讃の何り。さて又佛徳佛教の意を尋常此歌  
や無し。や知らば。さて又佛徳佛教の意を尋常此歌  
よ作り詠むと讚歎せる事ハ。空海よりいとはやく有  
し。形る法し。今その古く聞えくるハ。奈良の藥師寺の

る天平勝寶四年に建ふる佛足跡碑に誌せる歌。その  
かみお讚歎ある法し。其首に恭佛跡一十七首とあり。  
其首なるを。美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米尔伊  
多利都知佐閑由須礼知知波波賀多米尔毛吕比止乃  
多米尔とあり。次々形るも云々同じ句調なり。其次は  
呵嘖生死と題してその意は歌四首あり。おれも句調  
同一。又其趺石の文末に諸行無常諸法無我涅槃寂靜  
の語あり。さき歌の結の一句餘れるハをり反して詠  
へるに。おれ佛跡ふ向む此歌を讀て讚歎し詠ふ法  
き料形る法し。但し其をり反せるハ。歌ふとたよとりて

結句と趣なる餘意を  
かへて一々感ふ  
くものりりける  
むを此佛跡を諸人  
は拜ませりて  
其の讚句を詠む  
作して心書  
つけさむを反りて  
歌ふべくる書  
其定み結句を反りて  
歌ふべくる書  
きて神慮を悦懌し  
奉らむと書  
もひて神慮を悦懌し  
奉らむと書  
古神社の祭時唱ふ  
神歌二首  
麓は今日も鹿の伏す  
ら歌ふ例なりとぞ  
おむひ合さる  
神歌布諸國の中も  
さるおむひ合さる  
歌ハ天明七年其國  
三嶋郡石井八二社  
の國の式社を尋ね  
て見ゆり萬葉集五  
卷の歌山上の良大  
伴熊凝み代り  
己ぞ悲れ○萬葉集  
五卷の歌山上の良  
大伴熊凝み代り  
て死を悲れ長歌の  
異詞の歌一首の  
長歌の尾句も一と  
異詞の歌一首の

かを添たるものなり  
むとて五首とも  
尾句の體も同  
句を添たるものなり  
むとて五首とも  
尾句の體も同  
志といへる説ゆれど  
集中尾句のみも  
又中間の句にも  
句を一云と云ふ  
例と云ふは  
佛足歌雅たら  
ぬを強て作まるもの  
あれを然るお宅  
わたり後世  
は三十三所の觀音  
順礼するもの  
その寺々よて詠  
ふ信き歌ども  
お作まるが  
あるを詠歌といひ  
その詠  
歌を書て寺おとの  
佛前の額より  
ち置たるを詠ひ  
結句ををり反し詠  
ふがおほ  
ま此れなら  
ひあるをかの  
佛足跡の歌う  
まひるが  
おとれ遺風  
形る信し歌が  
られ拙く鄙し  
きまはら  
賤き女童詠  
ふべた料ふ

○假字本末上卷下

。世

作れるものなきぞなり。あの詠歌の事なり。あまの今昔  
物語集ふ。行基が事を擧て。幼童なりける時。行基を天  
八十歳より寂れるをもて推す。齊隣小兒等村の  
明天皇の御世の九年此生は當まり。小童部と相ともに。佛法を讚歎する事を唱へり。先  
づ馬牛を飼ふ童多く集りて此を聞く。馬牛の主。馬牛  
所用在て人を遣りて尋ね呼ぶる。使行て此讚歎  
の音を聞くに。極て貴くして。皆馬牛の事ハ不問。讚歎  
を流して此を聞く。如此志て男女老若る弱  
き来集て此を聞く。郷の刀祢を此の事を聞て。田をも  
不令作らして。如此き由无き態する者追むと云て行

ぬ。寄て聞く。云む方无く貴し。然まを泣て此れを聞  
く亦郡の司此事を聞て。大に嗔て我れ行て追むと  
云て行て聞く。無限く貴々まを。亦泣て留ぬ。亦國の  
司前サキハ使を遣□□令追る。使毎ハ不返来すし  
て。皆泣々此を聞く。然まを國司極て怪く成りて。自  
ら行て聞く。實に恐カシコく貴死事無限し。隣國の人ハ  
至レまを。聞き傳へて。来て此を聞く。此まを依て此の  
事を公に奏す。然まを天皇召て此を聞ゆ。極て貴  
死更無限し。其後出家して薬師寺の僧と成て。名を行  
基と云ふ云々。日本往生極樂記にも。行基菩薩云々。少  
年。時村童相共讚歎佛法。餘。牧兒等捨牛

馬<sup>ラ</sup>而從者殆<sup>シ</sup>數百若牛馬之主有用之時<sup>ト</sup>令<sup>レ</sup>使<sup>シ</sup>尋<sup>ニ</sup>呼<sup>フ</sup>男女老  
少來<sup>リ</sup>覓<sup>ル</sup>者聞<sup>ク</sup>其讚嘆之聲<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>聞<sup>ク</sup>牛馬<sup>ノ</sup>泣<sup>キ</sup>而忘<sup>ル</sup>歸<sup>ル</sup>菩薩自<sup>レ</sup>上  
高處<sup>ニ</sup>呼<sup>ビ</sup>彼馬<sup>ヲ</sup>喚<sup>ビ</sup>其牛<sup>ヲ</sup>應<sup>ジ</sup>聲<sup>ヲ</sup>自<sup>レ</sup>來<sup>リ</sup>其主各牽<sup>リ</sup>而去<sup>ル</sup>云々  
とある語<sup>ヲ</sup>つた<sup>リ</sup>おもふも  
件<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>行<sup>フ</sup>基<sup>ニ</sup>おかけて以<sup>テ</sup>る<sup>ル</sup>ハ例<sup>ノ</sup>僧徒<sup>ノ</sup>造<sup>リ</sup>說<sup>ス</sup>免  
きて信<sup>ジ</sup>あ<sup>リ</sup>と々まど佛法の讚歎を歌詞のおとく<sup>ニ</sup>作  
りてう<sup>と</sup>むたりしこと。あ<sup>リ</sup>其讚歎を聞<sup>ク</sup>る昔人<sup>ノ</sup>  
那<sup>レ</sup>べ<sup>ク</sup>の情<sup>ヲ</sup>さ<sup>レ</sup>ぬの然<sup>リ</sup>けむ事<sup>ヲ</sup>和讚<sup>ス</sup>お<sup>も</sup>ひあ<sup>リ</sup>  
すべし。さ<sup>レ</sup>又上<sup>ル</sup>も云<sup>フ</sup>へるおとく。梵讚<sup>ハ</sup>右<sup>ニ</sup>舉<sup>ゲ</sup>  
る句調<sup>ヲ</sup>一<sup>ニ</sup>體<sup>ニ</sup>のみ<sup>ハ</sup>あら<sup>ハ</sup>種々<sup>ノ</sup>別<sup>レ</sup>ある體<sup>も</sup>ある  
が中<sup>ニ</sup>皇國<sup>ノ</sup>尋常<sup>ノ</sup>短歌<sup>ノ</sup>句調<sup>ヲ</sup>あるも<sup>も</sup>あり。其<sup>レ</sup>光  
明真言<sup>ニ</sup>。唵<sup>オン</sup>阿<sup>ア</sup>謨<sup>モ</sup>伽<sup>ガ</sup>。五<sup>五</sup>毘<sup>ヒ</sup>盧<sup>ル</sup>尤<sup>ナ</sup>曩<sup>ナ</sup>摩<sup>マ</sup>訶<sup>ハ</sup>。叶<sup>七</sup>七<sup>七</sup>慕<sup>ム</sup>捺<sup>ダ</sup>羅<sup>ラ</sup>麼<sup>マ</sup>拈<sup>ニ</sup>。

五<sup>五</sup>鉢<sup>ハ</sup>陀<sup>タ</sup>麼<sup>マ</sup>日<sup>ジ</sup>縛<sup>ハ</sup>羅<sup>ラ</sup>。言<sup>セ</sup>鉢<sup>ハ</sup>囉<sup>ラ</sup>鞞<sup>ガ</sup>鞞<sup>ダ</sup>耶<sup>ヤ</sup>吽<sup>ツ</sup>。叶<sup>七</sup>七<sup>七</sup>とあるあどあ  
然<sup>リ</sup>あり。そもく天竺<sup>ノ</sup>音聲<sup>ヲ</sup>皇國<sup>ノ</sup>のおとく單直正  
雅<sup>ニ</sup>こそ<sup>ハ</sup>漢國<sup>ノ</sup>おとく溷雜<sup>ノ</sup>紆曲<sup>ノ</sup>の音<sup>を</sup>も  
て。字<sup>ヲ</sup>委<sup>テ</sup>移<sup>ス</sup>。その字義<sup>を</sup>主<sup>ト</sup>し。詩句<sup>も</sup>その字數<sup>を</sup>  
定<sup>メ</sup>て。音數<sup>ノ</sup>の定<sup>リ</sup>無<sup>ク</sup>た<sup>リ</sup>おとくはあら<sup>ハ</sup>。おのづ  
から皇國<sup>ニ</sup>似<sup>テ</sup>。音<sup>を</sup>主<sup>ト</sup>として。さ<sup>レ</sup>字<sup>も</sup>書<sup>整</sup>る法  
ある國<sup>あれ</sup>も。もとより歌<sup>唄</sup>讚<sup>歎</sup>形<sup>ど</sup>い<sup>へ</sup>る類<sup>ノ</sup>の調<sup>ト</sup>  
ある言<sup>ハ</sup>。音數<sup>を</sup>もて句調<sup>ノ</sup>の定<sup>リ</sup>ありて。種々<sup>ノ</sup>體<sup>ヲ</sup>  
あるが中<sup>ニ</sup>おのづから然<sup>ル</sup>皇國<sup>ノ</sup>の歌<sup>ヲ</sup>句調<sup>ニ</sup>似  
するも。あるあり。さ<sup>レ</sup>又皇國<sup>ノ</sup>の歌<sup>ヲ</sup>。神代<sup>ある</sup>の

さらうもいそひ。形へそ古形歌どもよ。和讃のおとく  
 七言に起れるハ。ひとりのもあること。然るも古事記  
 皇の御歌の首。ハ。初句七言の。多加紀志藝和那波留とよ  
 ませむ。へるハ。初句七言の。多加紀志藝和那波留とよ  
 言四言の二句。形うと。記傳又説うれ登る。宜波書  
 し。初句三言の例。ハ。同記。彌多能比登。母登。宜波書  
 紀。ハ。源磨紀。ハ。異利。森。胡播。柳。あどある。あれ。形。す。へて。歌。句  
 をか。あら。は。五言。七言。ふ。足。ら。ぬ。や。餘。れる。は。あ。の。づ。う。ら  
 める。定。格。の。よ。り。こ。ざ。る。と。き。ハ。そ。ま。な。拍。ら。さ。る。も  
 又。合。へ。る。詞。の。よ。り。こ。ざ。る。と。き。ハ。そ。ま。な。拍。ら。さ。る。も  
 何。り。て。其。歌。ふ。と。き。其。心。し。ら。ひ。て。節。奏。を。延。べ。も  
 約。め。も。し。て。歌。ひ。整。へ。き。る。も。の。あ。る。を。も。て。か。へ。り。て。は  
 鄙。歌。の。中。に。さ。る。趣。も。の。す。る。の。あ。る。を。も。て。か。へ。り。て。は  
 え。あ。る。ご。と。く。聞。お。さ。る。の。あ。る。の。中。に。さ。る。の。あ。る。を。も。て。か。へ。り。て。は  
 や。ら。る。の。形。り。さ。て。次。の。足。ら。ぬ。の。中。に。さ。る。の。あ。る。を。も。て。か。へ。り。て。は  
 五。言。七。言。の。あ。る。言。の。足。ら。ぬ。の。中。に。さ。る。の。あ。る。を。も。て。か。へ。り。て。は  
 の。音。の。言。の。あ。る。ハ。も。と。より。柔。軟。應。微。あ。る。阿。伊。宇。衣。於。

耳ぞく。ハ。平。生。な。歌。ひ。あ。る。た。り。ゆ。あ。り。然。る。を。上。世。の  
 お。と。く。平。生。な。歌。ひ。あ。る。た。り。ゆ。あ。り。然。る。を。上。世。の  
 ど。い。さ。く。の。ち。ら。あ。ら。べ。よ。み。あ。ら。く。を。あ。ら。ひ。と。な。れ。る。よ  
 あ。ら。せ。て。句。の。ち。ら。あ。ら。べ。よ。み。あ。ら。く。を。あ。ら。ひ。と。な。れ。る。よ  
 か。ら。お。の。け。ら。然。あ。空。海。よ。り。後。の。世。よ。今。様。と。い。ふ  
 多。い。も。此。あ。る。空。海。よ。り。後。の。世。よ。今。様。と。い。ふ  
 る。歌。を。も。は。ら。此。和。讃。と。同。じ。句。調。あ。る。ハ。和。讃。歌。ハ。口  
 形。を。さ。る。よ。り。轉。變。を。て。下。さ。ぬ。ハ。女。童。あ。ど。の。然。し  
 く。鄙。び。て。を。あ。り。た。り。こ。の。歌。ひ。あ。ら。節。奏。の。と。り。と。く  
 よ。い。て。た。て。世。よ。は。や。ま。も。て。ま。や。し。る。る。漸。ら。盛。あ  
 形。り。ける。よ。何。を。せ。と。上。さ。ま。ふ。も。お。よ。び。て。い。と。も。ら  
 し。あ。き。御。さ。り。に。さ。へ。今。様。と。て。も。興。い。ま。へ。る。ら  
 今。様。と。ハ。今。の。俗。言。ハ。當。世。風。つ。ひ。ふ。今。様。と。い。ふ。歌。の  
 と。云。ふ。同。ト。き。中。昔。の。詞。あ。り。つ。ひ。ふ。今。様。と。い。ふ。歌。の

○假字本末上卷之上



一體とはなりきりしものなるべき。但し中よを八句四  
るも足らざるも所れど其さき其事の書ふ見當り  
ハ希みて変體と云ふはし。其さき其事の書ふ見當り  
るも紫式部日記寛弘六年の條一條院天法成寺の池  
能船遊の事を記せる文コト。若ワカやかある君キミ者キミ今様歌  
うさみも船フネに乗おほせたるを。若ワカうをかき聞ゆる  
ま。大蔵卿の所トコロあるまじりて。さきうに聲うちそ  
へんもつゝおしや。枕草紙の歌をといへる條コト。今  
といひまの狭衣ヒラカミ。此コトるはかくてくせづきさる  
きるはやの今やう歌ウタどもをいとあらし。その聲  
みてうさみてすぐるけき云々。物語モノトコトの作者ソウシャ紫式  
部の腹ハラさまおるひやる。大貳ダイニ三位サンイ。此コト物語モノトコトの作者ソウシャ紫式  
部ベの腹ハラさまおるひやる。大貳ダイニ三位サンイ。此コト物語モノトコトの作者ソウシャ紫式  
部ベの腹ハラさまおるひやる。大貳ダイニ三位サンイ。此コト物語モノトコトの作者ソウシャ紫式

る。傀儡クワイ子コ者モノ無ナシ定サ居ル無ナシ當トク家カ云ク々々。動ウツ韓カン娥アハ之ノ塵チ餘ヨ音オン繞ニ梁リョウ  
周シユ云ク々々。今イマ様サマ古コ川カハ様サマ足タ柄カ片カ下カ催ヒ馬バ樂ガク黒クロ鳥トリ子コ田タ歌カ神カミ歌カ  
棹ササ歌カ過カ歌カ満マン周シユ風カゼ俗ソク呪ノ師シ別ワカ法ホウ師シ之ノ類ルイ不フ可カ勝シヤウ計ケイ即ソコ是コト天テン  
下カ一イツ物モノ也ナリとトもモ記キさサ祈ノりリ此コト主ヌシハハ後ノチ三サン條ジョウ院イン天テン皇スミのノ御ミコト  
世ヨ比ヒよりヨリそソのノ世ヨのノさサまマとトおオもモひヒやヤるルはハしシ又マタ  
古今著聞集に。嘉兼二年三月五日。鳥羽殿トトリノミヤ不行幸フコウキョウあり  
て。堀河院ホリカワノミヤ天皇テンノウ六日ムロヒ和歌ワカ能ノ興キヨウありアるル。云々クニクニ。次ツギ小御遊コミコトノリ  
云々クニクニ。盃酌朗詠サイシャクノウエイ今様イマサマちど有アりル。百練抄ヒャクレンセウ。兼安四年九  
月一日ツキノヒトヒ。於オ太上天タウテン法皇ホウ御所ミヤノ法ホウ住ヂヤウ有アりル今様イマサマ合カヒ事コト撰セン定テイ堪能カンネ輩ハイ  
卅人サウジン。十五箇夜ジュウゴノヨ間マ毎夜マイヨ一番被決イツパンヘキケツ雌雄メオウ師シ長チヤウ資賢シケン等トウ御ミコト為ナリ  
判者ハシラシメ十三日ジュウサンニチ仙洞センドウ今様イマサマ合カヒ之ノ次ツギ有アりル御遊ミコトノリ上皇ウヘノミコト令ノリ歌カ今様イマサマ給タマフ  
希代之美談也キノトノミダニナリ。上皇ウヘノミコトとト後ノチ白河院シラカハノミヤ天皇テンノウのノ御事ミコトノリありル。梁  
塵秘抄リョウジンヒセウ口傳集クチデンシユ。若宮ニギミヤとト泰チヤウりリてテ今様イマサマのノ

○假字本末上卷之下

卅

會終<sup>スカラ</sup>夜<sup>ヲ</sup>何<sup>リ</sup>て後<sup>ニ</sup>乱<sup>レ</sup>舞<sup>ハ</sup>猿<sup>樂</sup>白<sup>拍子</sup>志<sup>チ</sup>あ<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>く</sup>し  
き<sup>ニ</sup>治<sup>メ</sup>兼<sup>テ</sup>二<sup>年</sup>九<sup>月</sup>廿<sup>四</sup>日<sup>の</sup>事<sup>アリ</sup>形<sup>ル</sup>る<sup>レ</sup>は<sup>し</sup>とい<sup>へ</sup>る<sup>も</sup>同<sup>シ</sup>  
ト上<sup>皇</sup>の坐<sup>ませ</sup>る<sup>ほ</sup>ど<sup>此</sup>事<sup>あり</sup>建<sup>曆</sup>御<sup>記</sup>は<sup>諸</sup>藝<sup>能</sup>  
事<sup>云</sup>々<sup>後</sup>白<sup>河</sup>今<sup>様</sup>無<sup>二</sup>比<sup>類</sup>御<sup>事</sup>也<sup>何</sup>只<sup>可</sup>在<sup>御</sup>意<sup>と</sup>記<sup>記</sup>  
させ<sup>き</sup>形<sup>ど</sup>見<sup>え</sup>る<sup>り</sup>此<sup>頃</sup>及<sup>び</sup>て<sup>き</sup>さ<sup>は</sup>かり<sup>御</sup>所<sup>所</sup>  
ま<sup>り</sup>り<sup>形</sup>ど<sup>見</sup>え<sup>る</sup>り<sup>此</sup>頃<sup>及</sup>び<sup>て</sup>き<sup>さ</sup>は<sup>かり</sup>御<sup>所</sup>  
ざ<sup>ぬ</sup>り<sup>て</sup>も<sup>も</sup>て<sup>は</sup>や<sup>り</sup>ぬ<sup>き</sup>り<sup>り</sup>け<sup>り</sup>今<sup>様</sup>合<sup>合</sup>  
門<sup>本</sup>平<sup>家</sup>物<sup>語</sup>さて<sup>そ</sup>の<sup>今</sup>様<sup>歌</sup>の<sup>書</sup>に<sup>見</sup>何<sup>と</sup>り<sup>と</sup>る<sup>事</sup>  
も<sup>見</sup>え<sup>る</sup>り<sup>り</sup>さて<sup>そ</sup>の<sup>今</sup>様<sup>歌</sup>の<sup>書</sup>に<sup>見</sup>何<sup>と</sup>り<sup>と</sup>る<sup>事</sup>  
ハ<sup>著</sup>聞<sup>集</sup>刑<sup>部</sup>卿<sup>敦</sup>兼<sup>の</sup>う<sup>と</sup>ひ<sup>き</sup>る<sup>歌</sup>ふ<sup>ま</sup>せ<sup>の</sup>う<sup>ち</sup>  
ち<sup>の</sup>り<sup>る</sup>白<sup>菊</sup>も<sup>う</sup>つ<sup>ろ</sup>ふ<sup>見</sup>る<sup>こ</sup>そ<sup>何</sup>を<sup>れ</sup>あ<sup>ま</sup>我<sup>ら</sup>が  
か<sup>よ</sup>ひ<sup>て</sup>み<sup>り</sup>人<sup>も</sup>か<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>あ<sup>そ</sup>の<sup>あ</sup>祈<sup>り</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>と</sup>  
源<sup>平</sup>盛<sup>衰</sup>記<sup>に</sup>清<sup>盛</sup>入<sup>道</sup>形<sup>前</sup>り<sup>て</sup>祇<sup>王</sup>祇<sup>女</sup>と<sup>稱</sup>ふ<sup>白</sup>  
拍<sup>子</sup>が<sup>歌</sup>む<sup>り</sup>と<sup>て</sup>蓬<sup>萊</sup>山<sup>に</sup>あ<sup>り</sup>千<sup>年</sup>經<sup>る</sup>万<sup>歳</sup>千<sup>秋</sup>

か<sup>さ</sup>形<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>松<sup>の</sup>枝<sup>も</sup>ハ<sup>鶴</sup>巢<sup>ら</sup>ひ<sup>い</sup>ち<sup>ほ</sup>の上<sup>も</sup>ハ<sup>龜</sup>  
何<sup>そ</sup>ぶ<sup>お</sup>と<sup>佛</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>白</sup>拍<sup>子</sup>が<sup>う</sup>と<sup>へ</sup>る<sup>歌</sup>ふ<sup>君</sup>を<sup>は</sup>  
ト<sup>終</sup>て<sup>見</sup>る<sup>時</sup>ハ<sup>千</sup>代<sup>も</sup>經<sup>ぬ</sup>べ<sup>し</sup>姫<sup>小</sup>松<sup>御</sup>前<sup>形</sup>池<sup>を</sup>  
る<sup>龜</sup>が<sup>岡</sup>ハ<sup>鶴</sup>こ<sup>そ</sup>む<sup>祈</sup>居<sup>て</sup>何<sup>そ</sup>ぶ<sup>あ</sup>れ<sup>又</sup>祇<sup>王</sup>が<sup>歌</sup>  
へ<sup>る</sup>歌<sup>を</sup>を<sup>舉</sup>て<sup>佛</sup>も<sup>む</sup>り<sup>ハ</sup>凡<sup>夫</sup>あ<sup>り</sup>我<sup>等</sup>も<sup>つ</sup>ひ<sup>お</sup>  
ハ<sup>佛</sup>あ<sup>り</sup>三<sup>身</sup>佛<sup>性</sup>具<sup>り</sup>形<sup>あ</sup>ら<sup>隔</sup>つ<sup>る</sup>心<sup>の</sup>う<sup>と</sup>て<sup>さ</sup>  
よ<sup>と</sup>折<sup>か</sup>へ<sup>し</sup>三<sup>返</sup>まで<sup>あ</sup>そ<sup>う</sup>と<sup>ひ</sup>き<sup>ま</sup>云<sup>々</sup>入<sup>道</sup>打<sup>打</sup>  
う<sup>形</sup>づ<sup>き</sup>ぬ<sup>り</sup>て<sup>景</sup>氣<sup>の</sup>今<sup>様</sup>を<sup>む</sup>い<sup>く</sup>も<sup>う</sup>と<sup>う</sup>た<sup>た</sup>  
る<sup>も</sup>の<sup>り</sup>形<sup>此</sup>歌<sup>ハ</sup>雜<sup>藝</sup>集<sup>とい</sup>ふ<sup>文</sup>に<sup>書</sup>れ<sup>る</sup>ハ<sup>さ</sup>  
は<sup>あ</sup>し<sup>三</sup>四<sup>の</sup>句<sup>を</sup>よ<sup>々</sup>れ<sup>ども</sup>一<sup>二</sup>の<sup>句</sup>を<sup>引</sup>り<sup>へ</sup>と<sup>く</sup>

佛もむろしハ九夫なり。わまらもつひるハ佛とうこ  
ふハ。二人が隔られるとあるをいふにや。あほも聞  
けうは。今一度とのこまふ。ゆくたびも仰まハとて君  
があげこし。手枕の絶て久しく。なりまなり。あにし  
ひまなく。むつきけむ。あがらへもせぬ。もれゆ意に。と  
あれを二返そ歌ひたる。入道あさうちうなりづま。此歌  
ハ侍従大納言。帥の中納言むは免まあひぐして。契  
浅からざりしに。いくほどもあくりて別まつ。歎の  
あまりに。作り出してうとひし今様あり。それまハ。わ  
れらがあげこし。手枕の。とこそあるふ。一の句を引り

へく。君があげこし手枕。とうとふ事ハ。入道がとある  
を思ひあぞらへてうとふや。それをバ祇王ハいり  
るとして知里きりけるぞ。かやうの事ハ。時ふとりて  
上手あらで。あかあふま。あを祇王。今様ハ上手  
あ。上代まもなく。およむ。末代まもありがとと  
ぞほ名あふ。と見えたり。此事平家物語も載て。件の  
さし。異あり。盛衰記。此ほり。あも。その。あ。前の。世  
か。る。風體の。今様。四首。は。り。あ。り。その。あ。前の。世  
世。ふ。も。て。興。せる。さ。ぬ。た。も。ひ。や。る。は。し。この。ほ。り。あ。書  
る。今。様。歌。の。あ。れ。何。う。も。さ。て。その。歌。ど。も。あ。は。て。佛。教  
の。意。は。據。り。て。佛。語。或。ハ。字。音。の。詞。又。鄙。語。あ。と。を  
交。へ。く。和。讚。は。い。き。く。異。あ。ら。ぬ。ハ。も。と。和。讚。より。出。き  
る。歌。の。あ。れ。が。故。あり。但。し。こ。と。さ。ら。ま。あ。く。ろ。し。て。尋。常

の歌詞にてよめるもあり。源平盛衰記。治承四年六月福原に遷都の後、入道に暇あり。都へ上りたり。都の古京の荒ゆて、悲しさを今様は、浅茅が原とぞありけり。云々。ふるき都を来て見まは、浅茅が原とぞありけり。る月の光をくまなくて、秋風ののみ身は、はせし御所。中んさぶらひける女房たちを、はらまらせし御所。えて、さぶらひける女房たちを、はらまらせし御所。も見え、さぶらひける女房たちを、はらまらせし御所。るは、さぶらひける女房たちを、はらまらせし御所。やよひの慈圓僧正、北拾玉集、今様歌四首あり。花春のほふ雲、か軒の菅蒲も、かをるなり。夕暮さぬ、花橘も、にふ山郭公名、けり。月秋の始、けり。ぬま、は、こ、そ、何、れ、あ、ま、い、り、て、心、の、あ、と、ハ、つ、う、ぬ、ど、も、思、ひ、や、る、あ、そ、あ、ま、い、り、と、見、え、ら、れ、此、僧、正、嘉、さ、て、件、の、今、様、

歌よりも。はやく兼平の頃。紀貫之主の記されたる土佐日記。舟子楫取は。舟歌うとみて。那ふとも思へらば。其歌。春比野。ふてぞ。ぬをむかく。わうすく。たみて。手を切るく。つむたる菜を。親やまねるらむ。あうとめや。くふらん。かへらや。夜べのうなるもが。那。錢。あをむ。そらごとを。して。ねきのり。わざを。してももて。こほ。おのれ。きふ。あ。お。ま。あ。ら。は。多。う。お。ど。か。は。あ。れ。ら。を。人の笑ふを。きいて。云々。と見え。こり。詞つきを。さるも。のふて。歌調。お。鄙。く。て。笑。し。り。ま。なる。は。し。その。う。み。既。は。和。讚。ぶ。りの。歌。お。下。ぎ。ぬ。は。行。を。お。て。か。る。船。

○假字本末上卷之下

四

歌あどもいでき口あけきりしものなるべし。さて又  
上は擧ぐるぞた今様歌八句は詞はわらふ。まれよま  
句は多き少たもえらるるハ。あべのねらぬ格のねは  
つからひどきこるなり。はまりよらづらむけ さて  
其今様歌より轉りて。七言ふ起るる雜ハの歌ひもの。  
又漸よいてたぐるを。とりはべり雜藝と称ひ。まゝ野  
曲とも称ひ。又今様雜藝野曲など歌を別ワケても称へる  
事あり。中昔の書どもにまちくみ見えたり。其歌ど  
もをひと川へ擧て辨へむ事ハ。あくよは盡しかと  
し。又神樂歌催馬樂歌の中に。希ふ今様さぬなるら交コ

れるハ。本曲は興へらせむとて後ふ加へざるものあ  
るは。さて神樂歌也。體源抄豊原統秋永正十一年著。資忠云。上  
代ハ神樂は無調あり。は。神樂歌は事なり。而るは近  
来すべて以壹越調為之。我世ふ相替事是也。といふる  
由見えたり。もと無調也とハ。から國風は樂の調子に  
決きて。あちくさくさどほべき歌曲にてはあらざり。  
由とたあゆ。催馬樂の類は歌ハ。もとよりまことふ歌  
をうとふよはあらで。から國の樂調を主メとして。聲コふ  
まハ其笛どもの音ネぶりに謠ハツひつ。作り聲を出して  
歌詞を詠ナカえ合せらるるものとぞたあえざる。朗詠ハ。詩句を音訓

交へ讀て。こまもから國の樂笛どもハ詠ひ合せてう  
きふ趣ハ催馬樂のきぐみ形り。さてあゝ云へる神樂  
歌ハ催馬樂の類の事ハ。別ハ猿樂の謡といふものを  
よくハ論へる書あり。善くうきふあまきくる者也。催馬樂郢曲ハどの類ハ歌  
うとふ。聲ハふり合おとし。と或其道の人ハへり。さる  
こと形る様。その謡もあのはら形る音聲をはり  
上て。阿やあううふものあれ也。そ形ハ熟れぬまは。  
笛ハ音ハふりまハ化りがと形ある様。今の世にして  
ハ。絲竹形音をきく。知らぬはう里の田舎人の歌うと  
ふをきくに。詞こそは鄙びきれ。これ形あら形る聲形  
まくに。ちりあげとあちとからぬ曲節にうち歌ふぞ。

中々もねもいろく阿をきふ聞ゆるを。人いりお死く  
らむろし。さて又今様歌も後世も形りてハ。漢樂の越  
殿樂あどに合せてうとふ事と形るハ。又轉ハへる形  
里心得わく様。とあ形も。神樂歌催馬樂形ど。そもく  
七言も起ハたる歌の。以て形まも句調ハ鄙しく死に申る  
也。上にも論へることく。もと梵音を擬ハびきる和讚の  
音聲より。漸る轉ハまるもの。りて。もとより皇國もて  
うとひ出せる雅調も阿らざるが故あり。今も鄙歌を  
かあらば七言も起て歌ふ例のごとく。五言も起て歌  
ふ事のなきく。無きがたとくも形るハ。上も明引

の世萬曆の始わが皇朝の天正北頃撰書る日本風土  
記の山歌とて載る中難西之法外分連單皮所  
六格華里氣居法乃揆殺難蕪路隔搖那か書又記せ  
ども格わらけそのあみ此鄙歌を隔揺那か書又記せ  
るが格わらけそのあみ此鄙歌を隔揺那か書又記せ  
るせり。擗那ハはヤ一辞那王もと梵讚を擬びざる和  
讚ふ始りて今様那どのごと正雅からざる句調の  
歌曲此以て起るによりて。托の流うら人み那柔弱  
淫濫の情を起して。心よ深く感歎ふ風俗とありて。漸  
よさるるこの鄙歌をのみうさふ事とありぬるよ何  
をせり。つひ正雅しき歌うきふ事を廢れをて。歌  
と心へを。きよよみふとみ。たゞ作らふつくりて。き  
意詞のうへ此みもて何そびて。上代の如くうちねも

ふ真情の趣を。きりちにうたひあけて。心を述るころさ  
を。那きが如くよ那むあまきりたる。那布論を。元亨釋  
書の資治表よ。延曆二年十一月勅曰。梵唄讚頌。雅音正  
韻。以則真乘。以警俗耳。比來僧尼讚頌。動則哀蕩。叫吟曲  
折萬態。似伎藝。頗近鄭衛。有司往諸寺。告戒濫唱。此勅  
よは載らまざり。他古書に見えざる詔勅。那どの紀  
に載られざるも。何るハ例多き事なり。あの釋書を僧  
の書るもの。那がら。妄よ偽説を作らざる書あり。此勅  
語もそのかみ。正書に據り。たり。たあゆまをとり。つ  
三代格ふ。同年同月の六日。官符よ。僧尼悔過。用音事。  
右奉。今月六日。勅。偶。修善之道。攝心為先。精進之行。正念。  
為。本。比。年。之。間。僧。尼。懺。悔。座。妄。發。哀。音。蕩。逸。高。叫。非。但。厭。俗。  
中。之。耳。抑。亦。乖。真。詮。之。趣。如。不。改。正。何。肅。法。門。宜。仰。有。司。  
還。彼。濫。唱。之。記。入。見。え。り。同。趣。ある。事。なり。釋。書。に  
是。以。扶。衆。畧。記。入。見。え。り。同。趣。ある。事。なり。釋。書。に

○假字本末上卷之下

載せると同時の勅める様し。と見えくるをおもへむ。そのあままととの梵唄讚頌すら淫聲ありしをもて和讚の今様歌は轉里まゝ漸く鄙猥淫聲の歌を作里出して。第<sup>コトサムセム</sup>三線の音<sup>ネ</sup>ぶりにさへ合せて。ねもろくものほる事の下さまよりはトありきるを。せうたみどかき人ぞ。あもてちやー聴えやりて。いやあはしくも柔弱淫濫の情甚しくなりぬるハ。深く悪むべき因<sup>ヨシ</sup>ある事にこそああまらき。漢國もて聖人の樂事事を称へ論ひて。鄭衛の聲<sup>ネ</sup>めどいひどいしく淫聲を思ふる意をえハ。うべある事にあそはありけり。さそあま上<sup>トモカラ</sup>の佛足跡の碑

也。其足跡に向むと讚嘆する歌ありけむとねもたるるよつて。今三十三所の觀音を順礼する徒<sup>トモカラ</sup>が詠ふ歌も。それと同じ例<sup>ナゴリ</sup>の遺風<sup>ナゴリ</sup>なる法と推考する説を。因<sup>ヨシ</sup>あまいひ法し。其三十三所の觀音を定免と順<sup>ナゴリ</sup>り<sup>ナゴリ</sup>む。いまど考得ざまきと。其觀音の始<sup>ナゴリ</sup>ハ何時むる<sup>ナゴリ</sup>の傳説と。花山法皇の順礼し。あまきり。佛法を信み。あまきり。御私と。を捨て。大宮を忍出。あまきり。佛法を信み。あまきり。御私と。ふふありて。修行し。て諸國の寺々を拜巡り。あまきり。御私と。書どもありて。記せるが如く。皇太子。然る御行。せさせ。あまきり。同時におも。此上皇より。前融院。上皇も。同ト。あまきり。同時におも。此上皇より。前融院。上皇も。同ト。紀畧永延元年十月の條。圓融寺。法皇修行。南<sup>ナゴリ</sup>京<sup>ナゴリ</sup>巡<sup>ナゴリ</sup>礼<sup>ナゴリ</sup>の始<sup>ナゴリ</sup>諸寺と記せるを。ねもひ奉れ。其三十三所觀音巡礼の始<sup>ナゴリ</sup>

○假字本末上卷之下

○卅



事の書み見えけるハ。瑤囊抄ニ。三十三所。觀音を奉載  
て。此記ハ。久安六年。庚午。長谷僧正。泰諸之。或夜  
長谷僧正ノ夢ニ於。瑤囊抄ニ。日本ノ生身。觀音卅三所  
ヲ注セルハ。記録ヲ見ルニ。則今ノ日記也。ト云々。一度。泰  
諸ノ輩ハ。縦ヒ。雖造十惡。五逆。速ニ消滅シ。永離惡趣。ト  
云々。と記せり。千載集ニ。前大僧正。覺忠。三十三所ノ觀  
音をガ。み奉らむ。とて。所々。みる。侍り。ける。と。美濃  
の谷。汲み。奉らむ。とて。所々。みる。侍り。ける。と。美濃  
けり。佛の志。ある。あり。奉らむ。とて。所々。みる。侍り。ける。と。美濃  
限り。命に。かゝる。奉らむ。とて。所々。みる。侍り。ける。と。美濃  
忠ハ。命に。かゝる。奉らむ。とて。所々。みる。侍り。ける。と。美濃  
忠合へり。さて。其。覺忠ハ。尊卑。分脈。を案ふる。法性寺  
兼元。年入。滅六。十歳。と見。え。ざる。あれ。あり。幼雲。稿ニ。明  
應七。年。清。水。寺。新。建。慈。願。寺。幹。縁。序。ニ。日。東。之。為。俗。也。歸  
吾佛。者。縣。矣。而。敬。觀。音。大。士。為。之。先。也。院。々。設。其。像。云々  
三十三。所。為。之。最。云々。國。俗。謂。之。三十三。所。巡。禮。塔。宮。熊。野  
水。寺。其。一。也。と。い。へ。る。事。見。え。ま。と。太。平。記。大。塔。宮。熊。野  
落。此。條。ニ。三十三。所。巡。禮。見。え。ま。と。太。平。記。大。塔。宮。熊。野

弘治二年。み作れる。桂川。地蔵。記。賀茂。祭。行。装。の。文。の。中  
み。或。有。三十三。所。順。禮。行。者。打。簡。如。と。云。へ。る。詞。も。見。え  
きり。さて。其。觀。音。の。在。所。ハ。具。ニ。拾。芥。抄。瑤。囊。抄。ニ。見。え  
抄。等。ニ。見。え。ざる。如。く。み。て。今。と。少。異。終。り。さて。そ。れ  
巡。禮。歌。の。詞。以。テ。拙。劣。く。鄙。び。て。さら。に。古。歌。の。體。ニ。多  
あ。ら。ざ。れ。と。む。げ。ニ。近。世。に。作。ま。り。と。を。記。お。え。ば。元。和  
二年。み。記。せる。太。閤。記。ハ。伏。見。の。境。地。を。擧。たる。章。に。僧  
喜。撰。が。住。一。宇。治。山。も。近。く。あり。て。を。取。ち。喜。撰。が。嶽  
と。い。ひ。傳。ふ。あり。和。一。あ。ら。び。て。三。室。戸。と。云。ふ。高。山。そ  
び。え。つ。つ。麓。なる。寺院。三十三。所。の。順。禮。を。う。つ。觀。音。堂  
あり。順。禮。歌。と。て。夜。も。す。が。ら。月。を。ま。む。ろ。と。明。行。む。宇  
治。新。川。瀬。を。き。つ。た。白。波。と。あり。此。歌。今。の。順。禮。歌。と。同

○假字本末上卷之下

○卅九

但し今を三句を已けゆけば。元和の比はやく耳を  
れざる趣不たおゆるをもて。餘ホカの歌どもくた布あさ  
准へ知る法し。さく其もとかた佛足跡のおとく。佛  
前より歌唱ウタふ事の傳をたゆる寺にありけるが。其意を  
得て。順礼する鄙人ども此耳ちうくきおゆべく作里  
て詠ウタをし免くるが。然る寺々の阿まねききめしとた  
りしものある法し。かくて其順礼歌うきふを。さたお  
心とく免てきくけるに。國々所々にてたの法らら  
さくか曲節マクセツの異ありとたおゆるも交まくと。おほり  
きた風韻シラベを相同し。聲音に哀蕩叫吟あるは。もとより

以乞賤し。たきをた男女うち雜りきるが。一向ヒタスラに佛を  
信念タノミオモふ心たらしむおれむなり。然るふ己が故郷の若狭  
たたくりありきる山里に。絲竹シセツの音をネもたれく。あ  
ぬむりまらるともがらぐ。賀事ホギコトに酒宴サケノミして。かの順礼  
歌うさひ。手拍あげてあらたあそび。武藏ムサシの片田舎カタノカ  
ても然る慣ナラある處。或た女に白歌あどにも歌ふとあ  
ありと聞およ法り。清輔朝臣の袋草紙フクロクサシに。元慶ゲンケイの  
ろありとぞ。筑紫ツクシの門も同ドウ郭クワク公キミに。宿ヤクの垣カキ祐ユ過カぎ  
そ時鳥トキトリいづきの門も同ドウ郭クワク公キミに。宿ヤクの垣カキ祐ユ過カぎ  
とおいて下女シメナメに白歌シラカを唱ナ之ノ。元慶ゲンケイ聞キ之ノ。拭ヌグ涙ナミダといイる  
まゆ。たのまもよそながらほのきくたる事もありけ  
まど。よくも聞とく免マフざり法まは。然るうこの山里人

ま阿あぐり問へるふ。巡礼の時あそはあ終。然らぬ時  
うきふまは。ねの川からねもしく歌をるくもの形  
ま。とあともなくあぐり終。百人一首の中此歌も  
も。免でとかる終きをといひ終る然る歌をむに  
り侍らばといらへきりこそくちをかりしり。知  
又あ終も若狹るて。ねのまが日う終頃。年始ま節供  
あどゆふ日おものもらひの誓女が二人三人はまぎ  
ち来て。門も立て。君が世も千世も八千世おの歌を言  
賀ぎうとひきるぐ。かの順礼歌の曲節もね布あ同  
くきこめれど。をまのら終てきくあをまはたぐあ  
さ終きりき。此比國人は問ひきくふ。今をさる古代の  
歌うとあ事ハをさくきこえずとこ

ろつつけていまめきたるか。あ終るをねもひ阿をせ  
きの歌うとへりと云へり。か  
て。順礼歌も古の歌れうきひふまののりくも遺り  
きらむうとあひする形り。此あろしらひして猶諸  
國の偏田舎もてよくきづ  
ねたらむまは。さどろに歌ひぎぬの遺。さて今もあ  
ま傳もまるところのありぬべきあり。歌をやく  
きうたこくりにて。歌會此時も披講とて。歌をや  
ねあ免て讀阿げあへる事ありとほのうも聞傳へき  
終ど。いりある故も。ねもた秘事とてきまへりとい  
買バ知る終たもあらば。おのれさたも下野の宇津宮  
も行きるとき。手塚某が蔵傳へきる。永正聞書と題せ  
る古た寫巻を見きる中も。歌の披講は曲節の事を載

きるを抄<sup>ヌキ</sup>出てあゝに載<sup>カ</sup>せ。その題名の傍に朱に言  
れる所ありといへども、かたり先を記さむき、先足ら  
ざるを補むむ為の書入<sup>ノ</sup>と注せり。さく御本所様御下聞  
書ハ去<sup>ノ</sup>永正十七年之夏、於防州山口御本所御下聞  
御滞<sup>ノ</sup>留中受<sup>テ</sup>御家之説<sup>ヲ</sup>注<sup>シ</sup>之<sup>ニ</sup>畢<sup>ス</sup>と記せり。按<sup>ル</sup>に防州山口御下聞  
ハ大内義隆朝臣の領地あり。此ぬ録の招<sup>キ</sup>にありて西  
三條藤原實隆公山口は下向の事記<sup>ス</sup>るも、見<sup>エ</sup>る西  
有<sup>テ</sup>職問答<sup>ノ</sup>院實隆公記<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>と、牙<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>もみ<sup>ユ</sup>ら<sup>シ</sup>り  
此<sup>ノ</sup>聞<sup>キ</sup>書<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>る<sup>ノ</sup>に<sup>ハ</sup>實<sup>隆</sup>公<sup>ノ</sup>記<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>と、牙<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>もみ<sup>ユ</sup>ら<sup>シ</sup>り  
山<sup>ノ</sup>口<sup>ノ</sup>書<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>御<sup>ノ</sup>説<sup>ヲ</sup>を<sup>ハ</sup>聞<sup>キ</sup>書<sup>セ</sup>る<sup>ノ</sup>もの<sup>ノ</sup>從<sup>テ</sup>者<sup>ノ</sup>於<sup>テ</sup>ど<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>

一和<sup>ノ</sup>寄<sup>ノ</sup>ひ<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>ふ<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>せ<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>初<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>ハ<sup>ノ</sup>調<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>こ<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>て  
あり。あ<sup>ノ</sup>け<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>津<sup>ノ</sup>き<sup>ノ</sup>な<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>そ<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>わ<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>い<sup>ノ</sup>り  
あ<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>み<sup>ノ</sup>き<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>た<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>な<sup>ノ</sup>り  
又二重の<sup>ノ</sup>り

又別<sup>レ</sup>る雅<sup>ノ</sup>鍾<sup>ノ</sup>己<sup>ノ</sup>來<sup>ノ</sup>二<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>え<sup>ノ</sup>る  
ほ<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>知<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>可<sup>ノ</sup>  
志<sup>ノ</sup>ま<sup>ノ</sup>か<sup>ノ</sup>ら<sup>ノ</sup>結<sup>ノ</sup>ゆ<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>そ<sup>ノ</sup>め<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>

右<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>ひ<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>ハ<sup>ノ</sup>自<sup>ノ</sup>然<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>度<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>る<sup>ノ</sup>へ<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>ゆ<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>秘  
あ<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>ハ<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>り  
日<sup>ノ</sup>ろ<sup>ノ</sup>那<sup>ノ</sup>み<sup>ノ</sup>さ<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>よ<sup>ノ</sup>ち<sup>ノ</sup>れ<sup>ノ</sup>し<sup>ノ</sup>き<sup>ノ</sup>  
さ<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>と<sup>ノ</sup>て<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>け<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>え<sup>ノ</sup>ぬ<sup>ノ</sup>き<sup>ノ</sup>

されハ三<sup>ノ</sup>重<sup>ノ</sup>ハ<sup>ノ</sup>乙<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>調<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>に<sup>ノ</sup>か<sup>ノ</sup>へ<sup>ノ</sup>り<sup>ノ</sup>ゆ

一うと披講の次第あり先乙よかうしゝて二章それよ  
 三章をてれうと二三章かゝるて又乙よかうして  
 三章のふりに講し其の  
 けりてきうとを又おしうへ乙よ一返かうして  
 て三章のふりに講し其の  
 貴院まゝの又き人なるの身を二章の初三章乃  
 初おまゝの事とむ登臺のふりては但下句はうり三  
 章に講するも係畧をては次に披講しつけ物の  
 樂のへとも調子大のの中や来<sub>下</sub>畧  
 とあり。いま此披講の墨譜<sub>ハカセ</sub>を據りて。たしめてに唱<sub>ウタヒ</sub>試

むるふ。かの順礼歌の曲節<sub>フシ</sub>似きりげおねもはる  
 八。あまりにわづるあゝろのねしおや。とらけハね  
 もふものから。お布すてもやらであむ。

Handwritten text in a rectangular frame, oriented vertically. The text is written in a cursive script, likely a form of shorthand or a specific dialect. The characters are difficult to decipher but appear to be arranged in three lines. The first line contains approximately 10 characters, the second line contains approximately 10 characters, and the third line contains approximately 10 characters.

